

縄文時代における北海道の抜歯風習について

佐藤 功子

抜歯とは、人の健康な歯をある種の理由によって抜き去る風習である。日本列島における抜歯は、縄文時代前期から古墳時代にかけて行われており、一部の社会では数十年前まで残っていた。縄文時代における抜歯は、北海道から九州にかけて上顎または下顎の第2切歯を抜くⅠ2様式を中心にはじまる。晩期にはいると、抜歯例も増え様式も多様化し最盛期を迎える。この抜歯風習に関して、縄文時代の北海道を対象とし抜歯型式と埋葬状態の対応関係、また社会的機能について、林謙作氏と春成秀爾氏の説を中心に考察した。

まず、抜歯型式と埋葬状態についてである。林氏は、縄文時代中期、後期の東日本におけ

る3遺跡を対象として分析を行った。その結果、右か左のどちらかの歯を抜くことと埋葬頭位のかたよりには対応関係が存在し、上顎と下顎いずれかの歯を抜くことと埋葬時の顔の向きにも対応関係が存在する可能性があるとした。そこで、北海道においても林氏の述べたような関係がみられるかを、埋葬位置や副葬品などにも注目して分析した。しかし、何らかの結果が得られたのは2遺跡にとどまり、違いがみられた点も異なるため、北海道においては抜歯型式と埋葬状態に対応関係が存在するのか、それとも偶然の結果なのかははっきりとはしない。

次に、抜歯の理由についてである。春成氏は、抜歯理由を成人、近親者の死亡、婚姻と複数の理由により行われると考え、Ⅰ2様式についても婚姻に関連し出自を表すとしている。春成氏は、北海道では美沢1JX-4竪穴墓域を分析し、副葬品を持ち墓域奥部に位置する人骨は右側を抜歯され、副葬品がなく入口付近に位置するものは左側を抜かれているという結果を得た。そこから、右側抜歯の人骨は集落内の出身者、左側抜歯の人骨は集落外からの婚入者であると考察している。しかし、その後百々幸雄氏は、北海道の抜歯遺跡研究で美沢1JX-4出土の抜歯人骨は左側のみであるとしており、春成氏とは異なっている。そこで、抜歯者を集落外からの婚入者と仮定し、美沢1JX-4を含む北海道の抜歯遺跡を分析した。その結果、ほとんどの遺跡で副葬品を持つ人骨が集中して埋葬されており、春成説のとおり埋葬時に出自が影響する可能性がある。しかし、抜歯人骨が集落外婚入者であるという結果は出ず、抜歯が出自を表すとはいえなかった。

その他、成人式または成人を表すという説は、成人の抜歯頻度が低いことから。近親者死亡の際に哀悼の意味で抜歯する服喪抜歯という説は、民俗例にみられる服喪抜歯は生涯に渡って行われるため抜歯型式が豊富であり、この点が北海道とは異なること、また、実際に北海道では人骨とともに歯が検出されたという例がないことから。本州から抜歯された人物が渡来し北海道で埋葬されたという考えも、北海道では本州のように抜歯型式が変化しないことから、これらの3つの説も妥当とはいえなかった。

また、本州では縄文晩期に抜歯が盛行し、型式も増え抜歯例が非常に多くみられるようになるのに対し、北海道では縄文時代を通し

そのような様子は全くみられない。

以上の結果から、抜歯風習は本州から伝播したが、定着せず社会的機能も伴っていなかったという結論に達した。